

宇和海狩浜の段畑と農山村景観 住民ワークショップ①

日 時：2021年11月8日

19:00～20:30

場 所：狩江公民館

インフォーマント：文化的景観にかかわる活動者3名

沖村 智氏、兵頭 岩雄氏、佐藤 文明氏

聞き手：奥谷 三穂（歴史学科共同研究員）

主な質問事項：文化的景観に関わったきっかけ、関わりなど

まとめ作成者：奥谷 三穂

沖村智氏 1962(昭和37)年生まれ
宇和海狩浜の段畑と農漁村景観保存会事務局・かりとりもさくの会メンバー

- ・狩浜に生まれ育ち、1988～1993(S.63～H.5)年の5年間、狩浜の公民館主事として勤務した。その後は旧明浜町の中央公民館に10年勤務した。平成16年に旧町が合併して後は、市の教育委員会に勤務してきた。
- ・公民館での業務の中で特に地域のお年寄りの話を聞く機会が多くあり、見せていただいた写真から当時の暮らしの様子がよくわかった。その時に収集してきた資料や写真などが文化的景観の調査において役立ったようだ。
- ・戦争中に女の人だけで袴をはいてお祭りをやっていた写真を見て、それほどにこの地区では祭りが大事なのかと心を動かされた。それをきっかけに地域感が変わり地域づくりにのめり込むことになったのかもしれない。

- ・それがきっかけで、こうした写真やお話を書き留めておくことは、地域の暮らしと文化を後世に伝えるために大事なことだと考え、「公民館だより」に掲載してきた(図1)。
- ・狩浜の地域の人たちは、昔から共同体意識がとても強く、学校活動や青年会活動、祭りなどみんなで集まって何かするということがとても多かった。今でもこうした活動は続いている。青年団は途中10年ほど中断した時期もあったが、その後青年会に名前が変わり活動が続いている。
- ・地域の活動では、石垣や道直し、網戸の張替え、空き缶集めなどいろんなことをみんなでやっている。みんなで助け合わないとやっていけないところだから。
- ・元々漁村だったので、「あみこ」といってみんなで漁業の協力をするという習慣があった。そういう教育風土があったんだと思う。
- ・子どもたちにも青年会活動を受け継げる

- よう、上の世代が期待している。
- 子どもの頃は石垣を見てすごいものがあるんだなあ～と驚きをもって見ていた。きっと上にお城があるんだ、敵から守るための石垣で普段は畑を作っているんだ…などと思っていた。
 - 史料によると鎌倉時代から南予一带に石垣があったらしく山の中に残っている。昭和10年頃には今の段畑の形ができていた。石垣の石材がこの地にあったとしても、山の上までこんな風景ができるのもかと未だに驚きがある。
 - 江戸の天保年間には山田を開いたようだが、その時代にその下に石垣の段畑があったのかなかったのか、いつごろからこうした景観ができたのか、不明なところもある。まだ調べたいことがたくさんある。
 - 狩浜は地理的に平地が少なく、みかん農家と漁業の半農半漁の暮らしである。そのためか地元にあるものでなんでも工夫をして暮らしてきた。段々畑もそうして先人が積み上げてきたものであるが、ものを大事にするという習慣が身についている。
 - こうしたこの地域の文化性は素晴らしいと思っていたところ、2002～2003(H.14～15)年にかけて文化庁が各地の文化的景観を調査した際に、自分はちょうど社会教育課に勤務をしており、調査地として手を挙げた。その結果2次調査の対象

となる重要地域180か所に残ることができた。「白い石積の段々畑と宇和海」の名称で重要文化的景観二次調査重要地域に選定。）

- その後どうして行こうかと思っていた時に、2007(H.19)年に宇和島市の遊子水荷浦が重要文化的景観に選定された。
- その後はしばらく勉強会などをしてきたが目立った動きはなかった。しかし(こんなこと言ってもいいのかな?)2013(H.25)年に風力発電建設の計画が持ち上がり、地元で反対運動がおこった。佐藤さんが中心になって苦勞されていたが、当時はまだ再生可能エネルギー施設について環境アセスメントといった制度はなかった。
- 風力発電については住民の98%が反対した。事業者側も住民の反対があったら稼働させないということで、まずまず良心的な事業者だった。(兵頭氏)
- そういったことが重なって、結果狩浜地区から風車が見えないように計画を変更させることになり、風力発電をきっかけに住民の景観保全に対する意識が高まった。今振り返ってみると、それがきっかけだったといえる。私が誘導したということではなく、住民自身が判断してきたことである。
- また、その頃にたまたま文化庁の担当者が視察に來られて、狩浜の段畑についていいんじゃないか、と言ってくくださった。そして、文化庁の調査が実施され、2015(H.27)年には、全国史跡整備市町村協議会(宇和島大会)で文化庁の方に来ていただき講演会が開催された。
- これをきっかけに「西予市文化的景観調査委員会」が設立され学術調査がはじまり、文化的景観選定への動きが始まった。
- いろいろなことがタイミングよく重なって進んできたんだと思う。

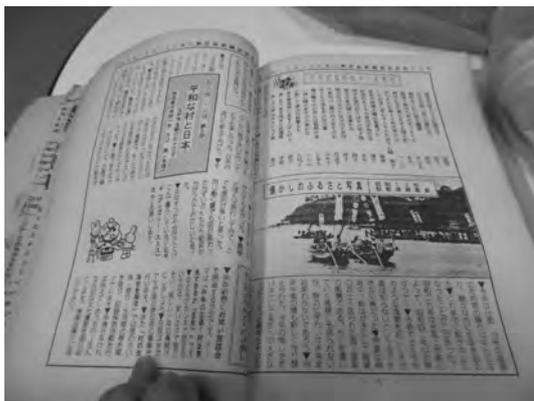


図1 一懐かしのふるさと写真昭和12年 秋祭り渡御風景—

狩江公民館だより平成3年12月10日発行「狩江公民館だより」
一部を撮影。(撮影者：奥谷三穂)

兵頭岩雄氏 1955(昭和30)年生まれ
宇和海狩浜の段畑と農漁村景観保存会会長・
かりとりもさくの会メンバー

- 狩浜に生まれ育って、一度も他の地域に出たことがない。高校の時に父親が亡く

なってミカン畑の家を継ぐことを決めた。地元に残る以上は故郷をなんとか守りたいなあという思いがあった。

- ・昭和 50 年頃から青年団活動も活発にやってきた。季節ごとにいろいろな行事をおこなって、子どもから年寄りまでみんな楽しむことをやってきた。
- ・自分たちより上の世代は団塊の世代で、主張がはっきりしたことをしていたが、自分たちの世代は楽しむことをモットーにしてきた。
- ・だいたいの住民が漁業と農業、ミカン畑をやっているが、農業も漁業も関係なくみんなで行事に参加する。田舎ならではのまとまりがある。昔から一度も、地域の中で何か問題が起こってぎくしゃくしたということがなかった。
- ・地域における公民館の役割は大きい。沖村さんや歴代の公民館主事さんの活動が今につながっている。
- ・ミカン畑は傾斜地より石積みしたところの方がずっと作業が楽である。生まれた時からあったし、石垣、段畑のおかげで今もミカン畑で暮らしている。昔の人は本当にすごいと思う。
- ・ミカンは海側に近い方が潮風を浴びて美味しくなる。もちろん日当たりや土質もあるが条件がそろるとおいしいミカンになる。しかし台風で風の害があるというリスクもある。風よけの防風林としてイヌマキを植えている。

佐藤文明氏 1957（昭和 32）年生れ
段々畑ガイドの会代表、かりとりもさくの会メンバー

- ・狩浜に生まれ育って、京都の大学へ進学した後、松江市で働いていた。しかし、夜な夜な秋祭りの夢を見るようになり、神輿が担ぎたくてたまらなくなり、30 年くらい前、31 歳の時に狩浜に戻ってきた。
- ・狩浜は秋祭りが中心で、牛鬼、鹿、舟などの練りがとにかくすごい。自分の地区は舟を出して三味線を弾く地区である。子どもの頃は力士をやったりした。あと

は牛鬼が怖くて逃げ回っていた。とにかく子どもから大人までみんな祭りは好きで一生懸命やる。

- ・住民の雰囲気がとてもよくて、祭りだけでなく青年団活動をもすぐにみんなが集まってやっている。そういう素地があったので、風力発電のこともジオパークや文化的景観についても受け入れて来られたんだと思う。
- ・狩浜ではパン屋をしながらガイドの会を運営している。
- ・戻ってきてからは沖村さんや兵頭さんらとかりとりもさくの会（2011 年設立）を中心に地域づくりを進めてきた。そんな中でいろいろな情報を得ることができ、風力発電の問題にも取り組んできた。
- ・元々は石積みの保存のことがしたく、どうしようかと思っていたところ、2013（平成 25）年に四国西予ジオパークが日本ジオパークの認定を受けたことから、これはちょうど良いということで、段々畑をガイドする会を立ち上げた。市のガイドとは別に狩浜だけでガイドをしていこうということにした。
- ・段畑のガイドをしながら石積が崩れているところを見つげると、またみんなで石垣直しをする。
- ・年間約 450 人をガイドしている。県内外の人、学校、団体、研究者などいろいろな方々が来られる。公民館の体制が新しくなってやり手なので、修学旅行生などどんどんお客さんを引っ張ってくる。
- ・メニューはミカン狩り、ジオクルージング、路地めぐりなどであるが、ジオツアーとしておこなっている。宿泊は「あけはま〜れ」である。農家民泊は今後増やしていければなあというところ。
- ・ガイド料は 3,000 円 / 一人である。（サイトはかりとりもさくの会の中にある。かりとりもさくの会 (karitorimosaku.jp)）。個人でブログも書いている「狩江のお祭り」で検索すると見られる。
- ・会員は現在 27 人であるが、実働は 10 人くらいである。それぞれ仕事や家のこともしながら、空いている時間でガイドをおこなっている。養成講座や会員同士の

- 勉強会も実施している。
- この仲間で地域づくりをずっとしてきた。楽しい。帰ってきてよかった。(翌日は、佐藤さんに段畑と路地めぐりのガイドをしていただいた。)

後継者・若者について

- 若い人の後継者については厳しいところもあるが、仕事のやりがいはある。(兵頭氏)
- 狩浜は宇和より後継者が多くいる。若い人たちはSNSで発信をしたり商品開発をしているいろいろやっている。(沖村氏、佐藤氏)
- こうしたら稼げる、という感覚でいろんなことをやり始めている。(佐藤氏)

- 最近、同級生の16人中4人が帰ってきた。それまでは自分ひとりだった。(兵頭氏)
- 今の子は、お祭りをやりたいといって帰ってくる。30代くらいかな。そういう風に思う子が育っているのがすごいと思う。昔に比べて職業的な価値観が変わってきている。戻ってきてこっちのことをやろうという子が増えてきている(沖村氏)。
- 自分の息子も後を継ぐことになった。ミカンはちゃんとやれば儲かる。漁業もちりめんや真珠の養殖などでやっていける。ただ、若者が少ないので、いろいろ話せる仲間がない。そこがちょっと寂しい(兵頭氏)。

狩浜の景観を牽引してきた人たち

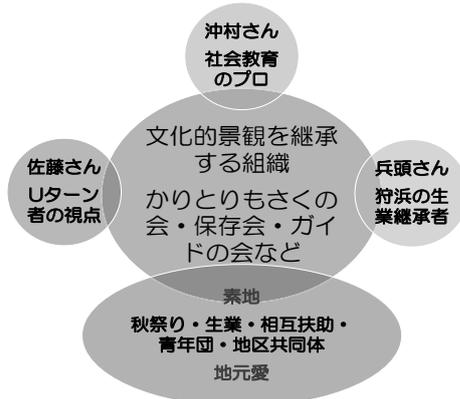


図2

(作成者：奥谷三穂)



図3 聞き取りの様子

宇和海狩浜の段畑と農山村景観

住民ワークショップ②

日 時：2021年11月8日

19:00～20:00

場 所：狩江公民館

インフォーマント：事業者の方々2名

佐藤 和文氏（佐藤真珠）、大津 清次氏（無茶々園）

聞き手：長田 萌（京都地域未来創造センター研究員）

主な質問事項：文化的景観に対する関心など

まとめ作成者：長田 萌

自己紹介

・佐藤和文氏

佐藤真珠の3代目で、真珠の加工販売、青のりの養殖、加工販売を行う

1次産業（漁業）から3次産業（販売）まで自分で行う

・大津清次氏

株式会社地域法人無茶々園 代表取締役

文化的景観に対してどの時点から参画していたのか？きっかけは？

- ・風力発電のための風車の設置を止めるために、ということが始まりだった。
- ・そのため、文化的景観を守ろうという意識とは少し違って、風車を設置したくない、という住民の気持ちがあった中で進んでいった
- ・風車の設置の話が、設置会社から区長に説明があり、そこから自分たちに説明が下りてきていた。
- ・その時点で、市役所や県には話が通ってお

り、経産省の認可を受けるのみになっていた。

- ・なんとかやめさせたい、と地域の住民で考え、市長や風車の設置会社に話に行ったが、受け付けてもらえなかった。（風車も景観の一部になる、という考え方（石垣も人工物だから…））
- ・そこで、沖村さんから「文化的景観」についての話があった。
- ・文化庁からの調査があることや、文化的景観に選定されることで、初めて旗色が変わったと感じた。

地域住民の結束力について

- ・昔からこの地域のPTAを含め、地域で育てていくという意識が高い。
- ・その分、横のつながりが強い。それを強く感じることができるのが春日神社でのお祭りである。
- ・お祭り文化があり、それを継承していく意識が影響している。なので、文化的景観

が地域意識醸成に関わったというよりもお祭りを含む地域内でのつながりの基礎があったから風車に対する文化的景観への意識につながったと感じている。(文化的景観内にお祭りも入っている)

- ・お祭り際には、住民を含め一か月前くらいから準備を始める。当日は、外に出ていった人やその関係者等を含めて今の住民の倍ほどの人々が見に来る。

春日神社のお祭りについて

- ・NHKの取材を受けたこともある
- ・2年間は神事のみ行ってきた。2年間あくことの不安感等はあまり無いが、次こそは開催したいという思いが強い。子どもが踊るものについては、継承も難しくなってくる部分はあると思う。
- ・人を集めることがまず大変ではあるが、もともとの地域の住民が、「お祭りをしたいから」というかたちで帰ってきているという人も多い。
- ・このお祭りを続けていきたい、という思いがみんなの共通認識としてある。

文化的景観への思い入れは？

- ・「文化的景観」という部分への思い入れはない。自分たちにとっては当たり前の光景でもある。保存という点においても住民の中で意識している人は多くないと思っている。
- ・ただ、風車の話があったから段々畑に対する認識は少し変わってきた。
- ・だから文化的景観と地域住民のつながり、といわれてもあまりイメージがわからない。
- ・また、文化的景観に選定されたからといって、この場所に対する認知度が上がったとは思っていない。知名度や保全という意味では、世界遺産にならないといけないんじゃないかという話が出ていた。
- ・ただ単純に「文化的景観」といっても知名度がないので、保全に手間がかかるだけにも感じる。
- ・ただ、今後の持続可能な目線で考えるのであれば、例えば、段々畑の上の森は杉を中心とした針葉樹林ばかりであるが、本来であれば成長の遅い広葉樹林が良いは

ず。そうした変化には時間とお金が必要で、自分たちの意思だけで行えることではない。その視点で考えると、あの選定された段々畑の狭い範囲で考えるのではなく、もっと広くこの環境が続けられるような環境づくりが大事だと思う。なので、景観を守るということだけではなく、その地域文化も含めて守っていくという理解と支援が必要だと思う。

- ・新しい段々畑を開墾することや昔にあった田を復活する等の発展させていく姿勢が景観維持には重要だとかんがえている。
- ・景観を意識して自分たちが繋がっているというよりも、人の中でのつながりがあり、そのつながりが景観の維持に対して影響を与えている、と考えるのが自然だと思う。

文化的景観と観光

- ・住民のなかでも個人の意見がある部分。観光客に来てほしい気持ちと来てほしくない気持ちは半々くらい。
- ・一住民としては来てほしいけれど、山で作業している人の中では作業中にズカズカ入ってきてほしくはない、という声もきく。
- ・そういう部分にたいしてかりとりもさくの会が仕組みをつくって取り仕切ることができればよい。
- ・ただ、文化庁の「文化的景観」というだけでは、景色をみて帰るだけの場所になってしまう。そうならないような活用策が必要だと思う。しかし、その活用については不透明。

狩浜らしさとは？

- ・革新を意識すること。今まで、この地区の住民で、自治体が始める前に自分たちで行った方がいいんじゃないか、ということを前向きに話し合ってきた。最近は少し減ってきた気がするが、チャレンジする姿勢が重要だと考える。
- ・地域の中でも、教育研究発表会を開催し、住民が学びたいことに対して講師の先生をよんだあとに皆で話し合ったりしている。
- ・例えば、地域づくり活動センターの設置についても、自治体から話が出る前に、皆

で話が出たので、島根県雲南市まで自分たちでこの発表会のひとつとして視察に行った。だからこそ、先行事例としてこの地区が選ばれていると思う。

かりとりもさくの会について

- 自治会とは別の存在。区長は、運動会や掃除等の事務的な部分を進めて行ってもらう存在。
- 会長、事務局長、次長、会計、代表区長（各地区の区長）、地域任用職員、理事（15人）が入っている。
- 区長が今まではお金を持っていたが、かりとりもさくの会ができたときに、お金が組織におりてくるようになった際に、話し合いを行って使用用途を決めていっている
- 主な意思決定は理事の中で決めていく。
- 狩浜地区のまちづくり計画については、もともとからつながりのあった愛媛大学の学生とともに作成した。漁業とのつながりや子ども目線で作成したのは、大学生からのアイデアである。
- 次の計画は、次の会長等が進めて行くこと。

かりえ笑学校について

- かりとりもさくの会で、話し合っ決めていった。最終的には、無茶々園が管理者に入ってもらうことになったが、その話し合いで決めていくという過程が重要だったと感じている。
- 無茶々園側としては、「自分が管理しますよ」という姿勢でいくのではなく、丁寧に地域の方で話し合ってもらった上で、いろいろな意見があっても最終的には無茶々園が受け皿として管理者になるという決定を地元住民側で決めてもらう、ということが大事だったと思っている。



佐藤氏（左）、大津氏（右）への聞き取りの様子

宇和海狩浜の段畑と農山村景観 住民ワークショップ③

日 時：2021年11月8日

19:00～20:30

場 所：狩江公民館

インフォーマント：かりとりもさくの会に関する方々 4名

宇都宮 一郎氏（かりとりもさくの会会長）

原田 義夫氏（かりえ笑学校校長）

二宮 祥子氏（かりとりもさくの会事務局）

西村 吉仁氏（西予市狩江公民館係長）

聞き手：今堀 誠弥（京都地域未来創造センター研究員）

主な質問事項：かりとりもさくの会について、文化的景観への関心など

まとめ作成者：今堀 誠弥

自己紹介

- ・宇都宮一郎氏（かりとりもさくの会会長）
- ・原田義夫氏（かりえ笑学校校長）
趣味は魚釣り、草刈（地域貢献）。
- ・二宮祥子氏（かりとりもさくの会事務局）
地域任用職員としてかりとりもさくの会が雇用。狩江生まれ狩江育ち。子育て世代。事務局1年目。もともとかりとりもさくの会のメンバーであった関係で雇用。
- ・西村吉仁氏
地域づくり活動センターの職員（狩江は公民館のセンター化に伴うモデル地区）。

かりとりもさくの会について

- ・かりとりもさくの会は、地域内にある様々なグループの大本となる存在。
- ・それぞれのグループが自主的に個別で活動していて、その中の一つが景観保存のグループ
- ・それぞれのグループが活動をする際はかり

とりもさくの会の理事会で相談していた
だき、了承を経て実施。

- ・かりとりもさくの会自体で動くことはあまりない。

かりとりもさくの会の設立のきっかけ

- ・もともと、市主導の取組が多かったが、地域住民自身で考えて事業や、予算執行も行うという形に移行された。（市からの働きかけ）
- ・狩江では、もともと、地域で活動する組織がたくさんあった。ほかの地域に比べたら住民が自主的に活動する土台は整っていた。
- ・かりとりもさくの会の会長について、はじめは前例なく、誰もやりたがる人などいなかったが、自治会長のOBが充て職として、かりとりもさくの会長になってきた。
- ・自治会とかりとりもさくの会は、実質的にメンバーもほぼ一緒。密接な関係性。

住民の理解・認知度について

- ・かりとりもさく会がどんなことをするか、当初は誰もわかっていなかった。しかし、年数を重ねるごとに少しずつ分かってきたという人が増えた。
- ・かりとりもさくの会の活動を理解している人は、地域の中で良くて7割ぐらい。
- ・無関心の層はどうしても発生する。最初は理解している人は、1、2割ぐらいだったが、常会での報告や公民館広報紙における活動報告記事の発信など周知に力を入れて、徐々に理解者が増えた。
- ・一般住民と一緒に活動するということはまだ不十分で、大きな問題と捉えている一方で、新しい事業も増える中、なんとか地域のためにやっているとわかっていただいて、参加協力していただくことも増えた。
- ・地域でかりとりもさくの会が注目されたきっかけは、狩江小学校が廃校となる際、かりとりもさくの会が廃校後の利活用の議論を地域で行う際に受け皿となったこと。かりとりもさくの会がアンケートを実施したり様々な事務をしたことで、地域から「かりとりもさくの会がやってくれた」と認識していただいた。
- ・笑学校は、無茶々園が指定管理者となって、子どもの遊び場が出来るなど目に見えて良くなった。
- ・コロナ禍前に行った記念事業はたくさんの地域の方がお客さんとして来てくれた。
- ・活動する人もいくらか増えてきているが、特定の方にどうしても偏る。自治会の役などを兼ねている。
- ・新しい方には声をかけづらい。

視察・見学の受入について

- ・公民館から地域づくり活動センターへ移行するにあたり、狩江公民館が西予市のモデル地域となった。そのことで、市内・市外から視察が来るが増えた。

ホームページの制作について

- ・昨年コロナ禍となり事業に使えるなかった予算を使った。
- ・狩浜が文化的景観に選定され、ガイドの会

の団員も増えたこともあり、市内外の問い合わせができるように、業者さんに頼んでホームページを作った。認知度もホームページを通して高くなったと感じている。

- ・ドローンの映像は無茶々園が設立40周年の時に撮影した動画を借りた。
- ・今後修学旅行の受け入れのページができる際は、かりとりもさくの会で撮ったドローンの映像を使う予定。
- ・写真や動画から引き込まれる方もたくさんいる。

まちづくり計画書について

- ・行政職員（沖村さん）がたたき台を作り、地域住民で何度も話し合いをして作成した。
- ・キャッチフレーズ「こびない」＝都会に対しても卑下しない

ICT活用について

- ・かりとりもさくの会ではラインとインスタグラムを活用中。
- ・ラインは、役員連絡用のグループと住民周知用のグループがある。
- ・住民周知用のグループは70人ぐらい。地域がカバーできている。ちょっとしたこの情報などはグループラインを活用。
- ・オンラインでの会議は考えていない。機能の使い方を学ぶより、集まるほうが早い。
- ・スマートフォン（スマホ）の普及率をあげようとスマホ教室を8回実施。5、6人参加されてスマホを活用されるようになった。
- ・買ってはいいものも使い方がわからず仏壇に飾ったという人や息子や娘に持たされたという人も多い。
- ・スマホは持っていない。ライングループは奥さんをお願いして入ってもらっている。（宇都宮さん）
- ・ガラケーである。なじみやすいし、不便を感じたことはない（原田さん）

拠点について

- ・狩江公民館がかりとりもさくの会の拠点となっている。笑学校との使い分けはない。

笑学校は必要な時に使っている。備品を少し置いているぐらい。

- ・一回、拠点笑笑学校に移したが、地域づくり活動センターとの連携を強化するため昨年公民館に拠点を戻した。

その他

- ・かりとりもさくの会の種まき班は、今はない。
- ・修学旅行受入について、今年から誘致を始めた。地域に子供たちを呼び込みたい。まずは関係人口を増やす。最終的に移住につなげられたら。

かりえ笑学校について（旧狩江小学校）

- ・廃校は地域にとってマイナスなことであったが、ピンチをうまくチャンスにできたと思う。
- ・平成25年度から総務省の交付金を3ヶ年使い、かりとりもさくの会が主体となり議論してきた。
- ・かりえ笑学校は沖村さんがネーミングをした。
- ・いまだに小学校の廃校は反対。賛成する人はいない。
- ・笑学校はまだ改善の余地ある。
- ・活用されていない空き教室がある。
- ・コロナ禍が影響している。これからというときなのに、一方で、他のさびれた小学校を見るとかりえ笑学校は大したものだと思う。
- ・廃校活用できている事実はすごいこと。地域で運営方法を決めてやっているのはここぐらい。
- ・無茶々園にいろいろな協力いただいている。
- ・地域が無茶々園を支えられたらと思うけど、まだ頼っている部分大きい。
- ・笑学校を使っている人は、お弁当屋さん・無茶々園・趣味の展示・子育てグループなど。
- ・多目的ホールは地域に開放している（体操教室 趣味のグループ）。
- ・プールは利用できない。ゆくゆくは無くすという市の考え方である。

コロナ禍の影響について

- ・この2年間、地域行事はほぼやれていない。
- ・かりとりもさくの会の会議はいくらか自粛はしたが、情報共有の必要性があったため、必要性最低限は実施した。
- ・かりえ笑学校においても、全く事業が出来ていない。本来は3か月に一度運営協議会も実施していたところであるが、これも自粛となった。どうしても時は少人数で実施した。

段々畑ガイドの会について

- ・会員は10名ぐらい。高齢者が多かった。だんだん会員は減ってきている。
- ・一方で入りたいという方は増えてきていて、今年新しく新ガイド養成事業を実施。
- ・高校生2名も参加。30代40代のメンバーも増えた
- ・有償ボランティアだが雀の涙の金額である。地域が好きだから参加して頂いている。

地域への関心が高い理由

- ・誰かのために何かをすることに喜びを感じる人が多い。
- ・小さな地域であり、近所づきあいは大事だと感じている。
- ・住民はみんな知り合いという関係性。
- ・この仕事はこの人に任せたら大丈夫というのがある。適材適所で成り立っている。

文化的景観への関心について

(原田さん)

- ・率先するほうではなかった。
- ・景観を守っていくことは、若い人に負担となってしまう。労力があることでもある。
- ・景観に登録しても、修繕費が全額補助出るわけではない。私的には先祖からいただいた遺産と考えるが、息子からは「ようやるなあ」と言われている。

(宇都宮さん)

- ・景観はあたりまえのことと感じる。外の人はずごい景観というけれど、当たり前すぎて、実感はない。
- ・高齢化は進むなか、景観を守ることは若い人にとってしんどいことなのでは。

(二宮さん)

- ・自然の恵みを生業とする以上、企業としても住民としても環境を守るべき。
- ・意識が高い若い農家が多い。それは段々畑がいろんなところで評価されているから。プライドを持っている。みんながみんなそうでないかもしれないが。

(西村さん)

- ・狩江公民館主事としては、狩浜と渡江のバランスをとることが難しい（文化的景観は狩浜のみ）。
- ・文化的景観の補助金の対象は狩浜のみ。一方負担があるのも狩浜。狩浜では新しい家も建てることも難しい。

移住者への取組について

- ・これまで無茶々園に就職するための移住者が多かったが、狩江の魅力にひかれてという方も増えてきた。

- ・一方で移住者の住まいがない。違う地区の市営住宅に住んだりされている。
- ・空き家バンクは市がやっているが狩江の登録がゼロ。
- ・空き家はたくさんあるが、貸してくれるところは改修が必要だったりとかする。
- ・貸す場合、それなりに綺麗な家じゃないと空き家バンクに登録できない。改修の補助金を作りたい。
- ・家財道具や仏壇を置いているから、登録が進まない。

青年会について

- ・青年会はかりとりもさくの会には入っていない別組織ではあるが、協力しあえる関係である。
- ・かりとりもさくの会の役員には入ってもらっている。
- ・昔は結婚したら抜けていたが、今は結婚しても活動をしている。
- ・移住者も青年会に入る。
- ・高齢化のため一度解散したが、かりとりもさくの会から要請があり、再度復活させた。



聞き取りの様子

宇和海狩浜の段畑と農山村景観 住民ワークショップ④

日 時：2021年11月8日

19:00～20:30

場 所：狩江公民館

インフォーマント：狩江の区長4名

大川 恵三氏、村上 尚樹氏、中川 長則氏、佐藤 祐樹氏

聞き手：鈴木 暁子（京都地域未来創造センターコーディネーター）

上杉 和央（文学部歴史学科准教授・京都地域未来創造センター統括マネージャー）

※後半部分参加

主な質問事項：区長の業務内容、文化的景観への関わりなど

まとめ作成者：鈴木 暁子

自己紹介

区長4名：令和3年～4年の区長（2年任期の1年目）

①大川 恵三氏（本浦区） 狩浜出身、4年前に松山からUターン、元豆腐屋経営

②村上 尚樹氏（本浦区） 無茶々園勤務（15年目）石川県出身 39才

③中川 長則氏（大狩浜区） 漁業 ちりめん製造、狩浜出身

④佐藤 祐樹氏（門之脇区） 宇和島市で養殖業に従事、会社員、狩浜出身

区長の業務

区長について

- ・実際はコロナ禍で行事がなくなっているので、行事は減ったが、区の行事を管理している
- ・学校行事（運動会、入学式、卒業式）、その他の地域行事に参加している
- ・役職がひとりの人に集中しないような数の

調整も行っている（社会福祉協議会などの役職の数も多い）

- ・かりとりもさくの会の理事にもなっている。区長はあて職的に理事になることになっている。
- ・区長会の開催は年に数回程度だが、コロナで行事がなくなり、話しをすることが少なくなった。
- ・お互いに名前や顔を知っているが、話すようになったのは、区長になってから。

区長の決め方について

- ・年齢順で決めている。おおよその年齢が分かるので、いつ順番が回ってくるのか分かる。一度、区長をつとめたらそれで終わり。また回ってくることはない。
- ・区長を断る人はほとんどいない。ある種の名誉職的なものという認識で、回ってくれば引き受ける感覚。地元に残れば、どこかで区長はするという認識はある。いまのところ男性のみ。

- ・自分は39才。知らないことが多いので、地域の人に教えてもらう機会になっている。住民のことを知る良い機会になる。なんだかんだ言って、自分が地域のことを一番知らないの、区長をやりながら、上の人に教えてもらいながら、やっている。
- ・Uターンの人も時々いるのでその人にやってもらう。
- ・区長経験者としてお祭り関係や神社の総代などに就くのが慣例になっている。取りまとめ役となっていく。
- ・狩江公民館の主事さんを通じては、道路や防災のことなど市役所や支所への要望も行っている。支所や市役所の方と直接話をするのはあまりない。

文化的景観について

注) 狩江は、狩浜（重要文化的景観の選定地域）と渡江（とのえ）から構成

文化的景観との関わりについて

- ・みかん栽培の土地を所有して現在も貸している。土地の所有者として選定の時に市役所とやり取りはしたが、当時の様子はUターンの前だったのであまり知らない。
- ・聞いたことはあるがあまり知らない。見慣れている風景なので。
- ・隣の宇和島市の遊子水荷浦の段畑は聞いたことがあり名前は知ってはいるが行ったことはない。
- ・言葉は聞いたことがある。自分としては、景色だけではない、暮らしと営みだと思う。地域のことを維持するためには、最終的には人だと思ふ。自分がここに来た当初は、地域や農業者に良く悪くも「適当さ」があった。団塊世代の反骨精神があった。熱量がある人もいた。いまの方が大らかさがなくなっている。昔のほうがいい意味でもっと適当だった。いまはちょっとサボるとすぐ言われる。それは人の数と熱量が失われているからだと思ふ。

春日神社の修理について

- ・質問（上杉）：昨年、今年と春日神社の秋のお祭りがコロナで中止になったが、同時期に春日神社の修理をしている。修理について地域のどんな反応がありましたか。
- ・建替えをしたいという方も地域にいて聞いていたが、ただそれだといままでの馴染みのある春日神社が変わってしまう、それは町のシンボルとして姿は留めて欲しいということで、建替えして全く違う建物になるのではなく、修理をしようという意見になった。寄付で集まったお金の文化庁などからのお金を加えて、補助対象となっている。
- ・「古くからのものを押し付けることになっていないか」と、地元の方の反応が気になっているが。

<回答>

- ・建替えや修理は反対する人はいなかった。どうやってお金を集めるの？ということには気になった。結果的にお金が集まって良かったね、というのが大枠。
- ・特段、建替えをしたいという意見は聞いていない。大事なものを残したいという考え方のほうが大きかったように思う。それでみんなは賛同、納得しと思う。
- ・正直、建替えか修理かは認識していなかった。きれいになおすことと考えていた。
- ・顔役の人、おじいちゃんが、お前は地域の顔役だから「10万円を」といわれて、それは「わっ」と思ったけど、それぐらいだったら出そうとなった。神社が残ればいいなど。

春日神社の祭事存在感

- ・正月よりも大きい行事である。
- ・自身もお祭りに関わりたくて、松山から帰ってきた。松山に住んでいた時もお祭りのたびに神輿を担ぎたくて帰ってきていた。お祭りの好きな人はこのために帰省する人もいるぐらい。
- ・行事が文化を継承させていっていると思ふ。なので、行事がなくなるのは困るし、地域の文化の今後にも関わってくる。



区長聞き取りの様子

平戸島の文化的景観

長崎県平戸市

日 時：2020年3月7日

調査者：上杉 和央（文学部歴史学科准教授・京都地域未来創造センター統括マネージャー）

鈴木 暁子（京都地域未来創造センターコーディネーター）

鈴木 更紗（文学部歴史学科4回生）

竹内祥一郎（文学研究科博士後期課程1回生）

行程：平戸市役所、平戸市観光協会、田平天主堂、かたりな、

NPO 法人山田・館浦地区まちづくり運営協議会、

根獅子・飯良まちづくり運営協議会

まとめ作成者：鈴木 更紗

平戸市観光商工部文化交流課 植野健治氏

・平戸の観光

現在、平戸の観光に関する課題として、平戸中心街と生月島に人が集中していることが挙げられる。そのため、観光協会をはじめ市内各所にモニターとパネル（図1）を設置することで、文化的景観に選定されている春日などにも足を運んでもらうよう企図している。このパネルは植野氏自身が製作したものである。

ちなみに、平戸で最も観光客が多い施設は田平天主堂で、年間10万人が訪れている。現在でも信仰の場として機能しているため入館料は徴収していない。観光協会が、平成26年度から観光客の抑制管理のため教会守を設置した。教会守は教会に所属する信者であるため、仕事に誇りを持っているという。

かつては観光客に対する取り組みだけでなく、地元向けの施策もおこなわれていた。地元に興味を持ち、地元のことを伝える人を

一人でも増やすことが狙いだ。世界遺産登録以前、バスをチャーターして平戸市民に地域の案内を実施した。初期はバスが満員となることもあったが、次第に人が減っていったため中止された。



図1 モニターと展示パネル

・春日集落とかたりな

重要文化的景観に選定されており、かつ世界遺産にも登録されている春日は世帯数

20、人口70人の小さな集落である。平成22年2月に重要文化的景観の選定を受け、平成30年6月に世界遺産に記載された。

今回訪れた「かたりな」は、平成30年4月にオープンした春日集落の案内施設である(図2)。平戸市が多目的スペースとして作り、観光協会が指定管理を受けている。しかし、実際の運営は春日の住民が担っており、観光協会が雇用するという形態をとっている。

施設は空き家になっていた古民家を5,000万円で改修したもので、柱を切ってスペースを広げ、板材を取り払って土足で上げられるようになっている(図3)。かたりなは母屋と隠居に分かれており、母屋には案内所、売店、図書館が設置されている。案内所には職員がおり、春日を訪れた人に見学する上で役立つ情報を伝えるなどしている。売店では地元の産物が販売されている。図書館にはテレビが設置されており、春日の紹介ビデオが三種類をニーズによって使い分けて上映している(図4)。その他にも、パネル展示や平戸に関する本などが陳列されている。隠居は、春日の住民と観光客が会話できる場所で、毎日1人語りべが在申している。ここでは一般的な

観光案内のような話ではなく、日常的な春日の暮らしについての話を聞くことができる。また、語りべの方自身が漬けた漬物も提供されることもある(図5)。

かたりな設立以前、春日を訪れる観光客は年間1,500人ほどであったが、現在は2万人が訪れている。これだけ観光客が増加すると問題が発生するのではないかとも思われるが、実際は観光客が訪れることによって、地元の人が積極的に清掃や道の整備をおこなうようになるなど、外部からのまなざしが地元の人々の誇りを醸成しているのだという。

かたりなは年間500万円の売り上げがあり、そのうち純利益は100万円ほどである。このうち20万円は自治会にキャッシュバックされている。賞味期限が短い商品はリスクが大きいため、リスクと手間のあまりかからない商品を植野氏は積極的に提案している。例えば、かんころ餅は、餅米を佐世保の業者に販売して加工してもらっているが、餅米代に加え春日ブランドの使用料ということで若干の追加収入を得ている。また、1年間もつため、在庫を抱える恐れが少ない。



図2 かたりな外装



図4 放送内容



図3 かたりな内部の様子



図5 自作の漬物

・補助事業と戦略

まちづくりに関する補助事業は各省庁が独自のノウハウを持っているため、その場に合わせた補助メニューを選択していく必要がある。

文化的景観に関する文化庁の補助事業では、休憩所4箇所、家屋34軒、かたりな、神社への道の整備を実施した。家屋については、その場所に住み続ける意思はあっても家を修理するのが困難という主に高齢者のために、木造瓦屋根という条件で補助金を交付している。現在修理中の家屋には500万円の補助をしている。構成要素を限定しすぎると、構成要素となっていない家屋にこういった補助が不可能になるという。

農水省の棚田地域振興事業では、石積みの修復をおこなった。石積みは石で積み上げられていることを重視しているため、元の石を集めて組み直すというわけではなく、新たに石を運んできて積み上げている。

NPO 法人平戸観光ウェルカムガイド 理事長 籠手田恵夫氏

NPO 法人平戸観光ウェルカムガイドは、平戸及びその周辺地域を訪れた人に対して歴史や文化、自然、街並みの紹介をするとともに環境保全をおこない、地域活性化に寄与する団体である。市や観光協会から独立して運営しており、連絡協議会も存在しない。ただし、観光案内所の一角にある事務所(図6)は、施設使用料が免除されている。

現在30名ほどのガイドがいるが、実質活動しているのは20名ほどである。年代としては定年退職した人がほとんどで、IターンUターンの人が多い傾向にある。ガイドの大半は、平戸検定の上級に合格している。検定は平成30年度で一時中断されてしまったが、平戸検定ガイドブックは現在でも販売されている。

ガイドはweb予約制で、飛び込みに関しては当日対応できる人がいる場合、受け付けている。ガイド料は2時間までは1,500円、その後1時間延長につき500円。客のニーズに合わせて、1時間から1日コースまで幅広く対応している。2時間コースの場合、

1,000円はガイドの取り分で、500円が運営費に充てられている。

案内する客は日本人が圧倒的に多いが、海外の団体客が利用する場合もある。英語版は対応可能だが、それ以外の言語には対応していない。ただ、添乗員が通訳してくれるため、今のところ問題はないという。



図6 平戸観光ウェルカムガイド事務所

田平天主堂教会守 瀬戸博子氏

田平天主堂は大正期に建てられた国指定の重要文化財となっている教会である(図7)。市内屈指の観光スポットであることから案内所が設置されており、ここに教会守が在申している。瀬戸氏は5年前からここに勤めている。

教会守の仕事は、訪れた人にどこから来たのか尋ね記録を取ることや、ミサ中に教会内に入らないように呼びかけたり、教会の案内をおこなったりすることである。普段は2人体制であるが、月に8-9日ほど1人体制の日がある。また、GWは1日1,000人以上が訪れるため、教会の信者の方にスケッチを頼むこともある。

訪問客は、国内の場合、関東や関西など様々な場所から観光目的で来ている。それに対して、海外からの訪問者はほとんどがキリスト教信者である。韓国人が最も多く、香港、フィリピン、台湾と続く。海外の訪問客は、信仰にまつわる精神性、例えば、教会のステンドグラスにあしらわれたツバキは26聖人殉教の血の色を表すとともに、首が落ちることが連想されるため武士が嫌いなツバキのも

とで密かに信仰を守ってきたことを示している、というような話をすると非常に喜ぶのだという。



図7 田平天主堂

春日町まちづくり協議会安満の里 春日講 寺田賢一郎氏

安満の里春日講は、春日町の有志により平成23年4月に発足した。春日の住民が全員加入しており、自治会と構成員は変わらないが、組織としては別物である。地域資源を活かした持続可能なまちづくりを推進しており、平成25年度には平戸市まちづくり大賞を受賞した。事業内容は、春日で取れた棚田米の販売やイベントの企画、かたりなの運営等多岐にわたっている。

かたりなの運営に関しては、かたりなで受付を担当する寺田氏によれば、春日を訪れる観光客の3分の2はかたりなに立ち寄っているという。かたりなに立ち寄ってもらうと、春日を回る上での注意点を伝えたり魅力の発信をすることができるため、双方にとって良いのだという。ただし、団体客はかたりなに立ち寄らない傾向にある。

かたりなができる以前は、観光客の増加によるゴミ問題を心配していたが、観光客に直接説明ができるため、問題には至らなかったという。

かたりなには観光客だけでなく地元住民も遊びに来ており、休日は子供も訪れる。寺田氏は、若者が春日に帰ってきて遊べるような空間にしていきたいと述べていた。

NPO 法人山田・館浦地区まちづくり 運営協議会理事（事務局長） 戸田幾嘉氏

NPO 法人山田・館浦地区まちづくり運営協議会は、平成28年2月に発足した平戸市生月町にある山田・館浦地区の住民自治組織である。平成29年12月にNPO法人認証を受けている。

当会は、山田区、館浦潮見区、館浦屋敷区、館浦浜区の4自治区から構成されており、人口は2,600人、世帯数は1,000戸である。

現在、山田・館浦地区では高齢化が進んでおり、75歳以上の方が4分の1を占めている。また、若い世代は子供の高校進学を機に移住するケースが散見されるという。

山田・館浦地区まちづくり運営協議会は、地域づくり部会、生活環境・防災部会、子ども育成部会、健康・福祉部会、産業振興部会の5つの部会に分かれており、各部会に権限を委任している。事務は3人体制で、そのうちの2人は協議会が雇用した人である。

この地域には公民館がなかったため、元々薬局だった場所をまちづくり協議会の事務所としている。まちづくり協議会の事務所は地域の寄合所としての機能を果たしており、年間3,000人の人が利用している。利用料は徴収しておらず、出入りも自由となっている。

主な事業内容としては、避難訓練や敬老会、生涯学習の支援、高齢者の見守り、イベントの運営等が挙げられる。自治会と連携をとりながら運営を進めている。

協議会には会費がなく、交付金と自己財源によって運営している。なるべく自己財源で運営しようとするものの、地域のためのNPOである以上、財源確保ばかりに力を入れるわけにもいかないというのが現状である。

運営における地元の意見の吸い上げの方法として、掲示の確認や就学支援に関するアンケートを実施している。アンケートは紙とインターネット（Google アンケート）両方で回答可能になっている。

根獅子・飯良まちづくり運営協議会 川上茂次氏

根獅子・飯良まちづくり運営協議会は行政の主導により 2019 年に発足した。まちづくり協議会自体は発足して一年経っていないが、文化的景観選定の年に発足した根獅子集落再編協議会に参加していた人がまちづくり協議会で中核的な役割を果たしている。

まちづくり協議会設立までには 7-8 回ほどワークショップをおこなってまちづくりについて話し合われた。

当会は、地域づくり、生活環境、健康福祉の 3 つの部会に分けられている。そのうち、健康生活部では現在買い物困難者の対策を考えているという。

まちづくり協議会でおこなった事業の 1 つに、お正月の販売会が挙げられる。最初は気が向かない人も一定数いたが、実施したら公民館には他地域の人も含む多くの人が訪れ、7-8 万円の収入があったという。

また、平戸市はこれまで軽微な土木工事などは地元へ請け負わせていたが、高齢化により担い手が減ったため、その部分をまちづくり協議会が請け負っている。樹木の伐採などは依頼者から 500 円をもらい、活動する人の給料はまちづくり協議会から出している。

一方、根獅子集落再編協議会では、発足した年に決議された「根獅子まるごと公園化まちづくり宣言」に基づいて草刈り隊が組織された。まちの人の要望に応じて草刈り隊を派遣し、協議会の方から 1 日 5,000 円、半日 3,000 円の給料を出していた。また、花いっぱい運動の際には、サザンカを 3,000 本植えた。これを外部の人が褒めたことにより、まちをきれいにしようという意識が高まったという。

平成 19 年には農水省の集落再編事業に申し込んで食祭りをおこなった。この際、文化的景観のまちを銘打って開催しようとしたが、農水省の事業だったため、文化庁の文化的景観を名乗ることはできなかったという。米や酒は文化的景観を銘打って販売しており、酒の需要は伸びているという。研究者のフィールドつながりで中国にも酒を売るようになった。

文化的景観であるということは、学校や学者の関心を引きつけ、連携をとる際に有効だという。実際、体験プログラムに来たいという人が増えたという。

平戸島全体の連携はこれからの課題であるという。現在、住民組織の連携はほとんどないため、平戸島全体の住民組織の連携網ができればとのことであった。

参考 web サイト

NPO 法人平戸観光ウェルカムガイド

(<https://www.hirado-guide.jp>)

最終閲覧 2020 年 3 月 21 日)

安満の里 春日講 (<http://kasugakou.web.fc2.com>)

最終閲覧 2020 年 3 月 21 日)

NPO 法人 山田・館浦地区まちづくり運営協議会

(<https://yamatachi-hirado.jp>)

最終閲覧 2020 年 3 月 21 日)